京都精華大学2003大学案内

人文学部　社会メディア学科［2003年4月開設］　環境社会学科　文化表現学科［2003年4月開設］
芸術学部　造形学科［洋画　日本画　立体造形　版画　陶芸］　デザイン学科［ビジュアルコミュニケーションデザイン　プロダクトコミュニケーションデザイン　映像　建築　テキスタイルデザイン］
マンガ学科［カートゥーンマンガ　ストーリーマンガ］

03

KYOTO SEIKA UNIVERSITY

FACULTY OF HUMANITIES

FACULTY OF ART

融合する人文学部と芸術学部。「表現」する大学。

人・文化・社会を掘りさげる人文学部と、アートを追いもとめる芸術学部。
ふたつの学部で京都精華大学はなりたっています。
かけ離れてみえるかもしれませんが、
「表現」という共通の基盤でこれらの領域はつながっています。
人・世の中・自然……あらゆるものごとを深くさぐり、これまでとはちがう「ものの見かた」を人々に提示する。
そのことによって考えかたや感じかたの幅、ひいては生きかたの幅をひろげる。
人文学もアートもめざすところは同じなのです。
京都精華大学は、人文と芸術の学生が同じキャンパスの中で刺激を与え合い交流できる
日本でも珍しい大学です。

2012/06/12
01040263
京都精華大学　寄贈
京都精華大学情報館

1 京都精華大学のありよう
3 INDEX（目次）

4 ●人文学部
6 新人文学部の概要
7-14 ●社会メディア学科
4ヵ年間の学び方ステップ
学科紹介・取り組めるテーマ
科目紹介
15-22 ●環境社会学科
4ヵ年間の学び方ステップ
学科紹介・取り組めるテーマ
科目紹介
23-30 ●文化表現学科
4ヵ年間の学び方ステップ
学科紹介・取り組めるテーマ
科目紹介
31-34 メディア・表現科目
35-36 情報リテラシーと語学教育
37-42 フィールドワークの4年間のステップ
フィールドワーク
43-46 卒業論文・制作
47-50 人文学部教員一覧
51-56 卒業後の進路
57 大学院

58 ●芸術学部
59 芸術学部の概念
61-64 ●洋画
65-68 ●日本画
69-72 ●立体造形
73-76 ●版画
77-80 ●陶芸
81-84 ●ビジュアルコミュニケーションデザイン
85-88 ●プロダクトコミュニケーションデザイン
89-92 ●映像
93-96 ●建築
97-100 ●テキスタイルデザイン
101-104 ●カートゥーンマンガ
105-108 ●ストーリーマンガ
109-112 芸術学部教員一覧
113-119 科目紹介
120 国際交流
121 伝統産業実習
123-126 卒業・修了制作展
127 卒業後の進路
129 大学院

131-134 知的に外部に開放された大学
アセンブリーアワー／知の工房
表現研究機構
135-140 環境に取り組むキャンパス
エコキャンパス／施設・設備
デジタル環境
141 京都にある大学／京都で暮らす
143 交通案内
144 沿革

知らなかった視点を獲得する。知的好奇心を刺激する大学。

授業やクラブだけが大学じゃない。
精華のキャンパスではいろんなことが起きている。
とりわけ目立つのは新しい「知」に出会う場面。
その出会いを企てる仕掛けがたくさんある。
世界に知られた人も海を越えてやって来たり、
文化・芸術・社会の広いジャンルで活躍する人から社会の現場の話が聞けたり、
自分の価値観を覆したり、カラをやぶったりするには絶好の機会だ。
精華の在学生はもちろん誰でも参加自由にしているため、
一般市民の参加も多く、知的に外部に開放された大学ならではだろう。

現場の息吹を第一人者が運んでくる。

●アセンブリーアワー●

アセンブリーアワーとは、「集会の時間」のこと。学外から招いた講師に自由なテーマで語ってもらう講演会だ。講師は、文化・芸術・社会の広いジャンルで活躍する各界の第一人者。毎回、時代の核心に迫る講演が展開される。卒業単位にはならない。けれど刺激的。たったいま何が起きているのか、それぞれの現場の息吹をキャンパスにいながら感じることができるのだ。会場は、参加者でたいてい一杯になる。

アセンブリーアワーは木曜日の14：40～16：10。月1回のペースで開かれる。事前の申し込みは不要。参加無料。在学生はもちろん市民の参加も多い。

アセンブリーアワー 過去5年間の講演者

（ ）内は講演当時の肩書き

1997年
工藤直子（詩人・児童文学作家）
西成彦（立命館大教授）
是枝裕和（映画監督）
村井康彦（滋賀県立大教授）
水谷尚子（中国近現代史研究者）
窪島誠一郎（信濃デッサン館館主）
柳川喜郎（御嵩町町長）
鶴見貞子（本学教員）
笠原芳光（本学教員）
岡井隆（本学教員）

1998年
仙頭直美（映画監督）
石川准（静岡県立大教授）
楢木野衣（美術評論家）
小島文毅（トヨタ自動車 環境部担当部長）
金子達仁（フリーライター）
森本雅樹（天文学者）
八谷和彦（メディア・アーティスト）

1999年
井筒和幸（映画監督）
野田知佑（カヌーイスト／エッセイスト）
鷲田清一（哲学者）
谷村志穂（作家）
村上　隆（現代美術家）
バイマーヤンジン（チベット人声楽家）
松岡環（アジア映画研究者）
今福龍太（文化人類学者）
橋口亮輔（映画監督）
萩尾望都（漫画家）
田村太郎（多文化共生センター代表）
光島貴之（美術作家）
木下直之（東京大学助教授）
米原万里（ロシア語通訳・エッセイスト）
高田宏（作家）
中野裕之（映画監督）
川本三郎（文芸評論家）
奈良美智（美術作家）

2000年
李鳳宇（映画プロデューサー）

2001年
信藤三雄（グラフィック・デザイナー）
PANTA（ミュージシャン）
やなぎみわ（美術家）
東浩紀（評論家）
藤本由香里（評論家）
高野孟（インサイダー編集長）
高谷史郎（ダムタイプアーティスティック・ディレクター兼映像担当）
秋尾沙戸子（ジャーナリスト）

キャッチボール的対話が生み出す「知」の輝き。

●公開連続対論「知」の工房●

第一線で活躍する学内外の知性がひとつのテーマで連続対論。「知」の新しいあり方を問いなおし創りだす工房だ。

対論者の個性と意見がぶつかりあう「攻防」の場でもあり、参加者のなかで新しい「知」が芽生える出会いの場でもある。

1994 テーマ 宗教
11月30日／梅原猛 VS 笠原芳光「宗教はこれでよいのか」
12月7日／岡井隆 VS 笠原芳光「文学にとって神とは」
12月14日／山折哲雄 VS 笠原芳光「仏陀か、イエスか」

1995 テーマ 「日本はどうなる」
1月30日／上野千鶴子 VS 柴谷篤弘「日本型雇用にとどめをさす。雇用の危機と日本のリストラ」
2月7日／松井朔子 VS 柴谷篤弘「日本語教育とジャパン・リテラシー」
2月25日／梅棹忠夫 VS 柴谷篤弘「日本語のゆくえ」

1996 テーマ 〈現在〉をどう生きるか」
1月22日／山折哲雄 VS 笠原芳光「宗教の現在」
2月5日／倭万智 VS 岡井隆「詩歌の現在」
2月26日／日高敏隆 VS 樋口勘「環境の現在」
3月4日／浅田彰 VS 鈴木隆之「都市の現在」

1997 テーマ 「マンガと〈現在〉」
2月19日／竹熊健太郎 VS 斎藤光「マンガは世界を啓示するか」
2月26日／夏目房之介 VS 斎藤光「マンガは文化を表現するか」
3月14日／秋山孝 VS 牧野圭一「メディアとしてのマンガ」
3月19日／高月紘 VS 牧野圭一「マンガとコミュニケーション」

2000 テーマ 環境への新しい感性
11月6日／森岡正博 VS 山本英和「生」と「死」のコミュニケーション
11月13日／鬼頭秀一 VS 内山　節「地」から見る地域の思想
11月20日／鶴見俊輔 VS 鷲田清一「かこまれている」わたし

2001 テーマ 「物語と遊び」
10月27日／木下勇 VS 倉科勇三 VS 松本健義 コーディネーター 葉山　勉「こどもの遊びと世界創造力」
11月10日／小森康永 VS 野口裕二 VS 野村直樹 コーディネーター 山田富秋「物語としての家族」

大学から開放された〈知〉の連続講座。

●公開講座Gardden●

すべての人に開かれた精華の公開講座。それぞれの領域の第一人者から少人数クラスで直接指導を受ける。単なる教養講座のレベルをこえて、思想と表現の深化を追求する内容だ。

ひとつのテーマについて連続して探究する。社会人が参加しやすいよう主に平日の夜間に開講。参加は有料。事前申し込み制。

2001年度 前期プログラム

■宗教論講座「近代詩歌の宗教性」笠原 芳光
■デザイン講座「自己表現のためのDTP制作」小林 尚子
■身体表現講座「リラクゼーションのためのボディーワーク－表現編－」坂本 公成・森 裕子
■英語表現講座「ベーシックイングリッシュの発想と方法－850語ですべてを表現する－」片桐 ユズル
■短歌講座「現代短歌入門～読みかた、作りかた～」岡井 隆
■写真講座「写真表現の現在」八角 聡仁・野村 佐紀子・吉野 英理香
■デジタル表現講座「デジタルアニメ「アリーテ姫」の世界」片渕 須直・小黒 祐一郎・田中 栄子・福山 亮一
■映像表現講座「映画の可能性と未来」原 将人
■音楽表現講座1「Lecture about System of OVAL」マーカス・ポップ
■音楽表現講座2「音楽の背景」山中 透
■古文書入門「中世文書から近世文書へ～鎌倉、南北朝、室町、戦国、江戸～」橋本 初子
■木版画制作講座　リチャード・スタイナー
■陶芸制作講座　河原 正彦・川崎千足・金子賢治
■GARDEN SPECIAL PROGRAMワークショップ／パフォーマンス　ヴィンセント・セクワティ・マントソー

2001年度 後期プログラム

■宗教論講座「新宗教とその開祖」笠原 芳光
■デザイン講座1「自己表現のためのDTP制作（初級編）」小林 尚子
■デザイン講座2「自己表現のためのDTP制作（中級編）」小林 尚子
■身体表現講座「リラクゼーションのためのボディーワーク－表現編－」坂本 公成・森 裕子
■英語表現講座「ベーシックイングリッシュの発想と方法－850語ですべてを表現する－」片桐 ユズル
■写真講座「写真表現の視点と方法」金村 修、八角 聡仁
■音楽表現講座「おとのかたち」カール・ストーン、バーナード・ギュンター、スティーヴ・ロダン
■アニメーション制作講座「いろいろな素材・いろいろな技法」米正万也
■アートマネジメント講座「アートの戦略」小林昌夫、長谷川祐子、白石正美、伊藤憲夫、鷲島哲
■古文書入門「寺院に関する古文書の世界」橋本 初子
■木版画制作講座「自由な表現のために」リチャード・スタイナー
■短歌講座「現代短歌入門～読みかた、作りかた～」岡井 隆
■文学表現講座「詩のリズム歌のリズム」吉増剛造、穂村弘

ダライ・ラマ14世

「環境と人間」を説く。

世界が精華にやってくる。

世界に知られた人たちも
海を越えてやってくる。
「自由自治」の理念を掲げる
京都精華大学とはからずも
共通する主張を、時には説き、
時には訴える。
彼らのすぐ近くで接して話してみて
獲得するのはこれまでの
自分とはちがう視点。

困難はあって当たり前。失敗しても挑戦しよう。

人文学部にできた環境社会学科の開設記念イベントに参加した。人類最大の課題のひとつとなった環境問題と仏教的ライフスタイルとの関係など人間のこれからの生きかた・考えかたを講演・シンポジウムで説いた。

■あらゆることを疑え。

イベント初日の2000年4月16日は、キャンパス内の大学体育館で講演会が開かれた。テーマは「自然との共生を求めて」。中尾ハジメ学長のあいさつに続いて音楽家の坂本龍一さんが登場し歓迎メッセージを送った。

演壇にあがったダライ・ラマ14世は環境問題についてつぎのようにのべた。「機械に頼る社会は人間性をそこなうおそれがある。科学技術だけに頼ると人の気持ちも機械のようになっていく。生きる知恵を自然から学ばなければならない」。講演のあと学生からの質問にひとつひとつ答えた。「法王にとって宗教とは」との問いへのこたえはこうだ。「理解できないことへの説明であったり、すがる対象であったり。宗教はいろいろ説明できる。しかし仏教は、宗教といえば宗教だし、ちがうといえばちがう。よく観察して分析し、よりよい形に向上させる。あらゆることに疑いを持って実証し、よりよい社会をつくる。それが仏教だ」。

コミュニケーションが苦手だと悩みごと相談をもちかけた学生を壇上に手招きし抱き寄せて励ます場面もあった。

■ライフスタイルを見なおそう。

イベント2日目の17日は、国立京都国際会館でシンポジウム。フィンランドの心理学者レオ・マトスさんや精華教員らと「環境と人間――新しい生き方を求めて」と題して話しあった。

席上ダライ・ラマ14世は「環境問題を考えるとき、一国だけではなく地球全体で論議する必要がある。と同時に一人ひとりが努力する必要もある」と述べた。環境問題にからむ南北問題にもふれ「モノがあり余っている国もあれば、食べ物さえない国もある。日本など先進国はライフスタイルを見直す必要がある」と語った。

■生活のなかで実践しよう。

これから社会に出ようとする若者に向けて次のようなメッセージも送った。「考えるだけでは変わらない。一人ひとりが生活の中で実践してこそ環境は変わっていく。平和についても、生活に密着したレベルで実践すればいい。社会に加わろうとするとき困難や障害に出あうだろう。その下準備をしておいてほしい。失敗しても絶望せず、また挑戦する楽観的な態度を忘れないでほしい。小さなアリにでもできるのだから、もっと力のある人間にできないはずがない」。